

## 2020. 7. 26. 聖霊降臨節第9主日礼拝式説教

### ルカ福音書講解説教

聖書：ルカによる福音書 11章37-54節

『神による幸い』

今日の聖書にはファリサイ派と律法学者に対する主イエスの「あなたがたは不幸だ」という発言がそれぞれ三つずつ、合計六つの言葉が記されています。

あなたがたは不幸だ、というのは、それ自体かなり過激な表現ですが、元の言葉では、あなたがたに災いあれ、というさらに激的な言葉で、ちょっとした批判というのではない。しかもそれが六つも連続しているのです。腹に据えかねていたものが一気に溢れ出している、そういう語り口です。

主イエスがこれほどに激的な言葉で語っている、それはなぜなのか。そのことを思わないわけにはいかない。今朝はこの六つの言葉を一つずつ聞いていく、というのではなく、この六つのことの核心にあるもの、中心にあるもの、それを受けとめて聞いていきたいと思います。

話のきっかけはこうでした。主イエスを食事に招いたファリサイ派の人がいて、主はその招きに応じて、その人の家に入っていかれたのです。その際主イエスが食事の前に身を清めなかったのを見て、ファリサイ派の人は訝ったのです。不審に思ったのです。食事の前に身を清める。それは当時のユダヤ人ならだれでも知っている習慣で、衛生上のこと以上に宗教的な習慣でした。その訝るファリサイ派の人の顔を見て、主イエスは語り始めたのでした。あなたがたは、杯や皿の外側はきれいしようとするが、自分の内側は強欲と悪意に満ちている、というのです。また、あらゆる野菜の十分の一はささげると、正義の実行と神への愛はおろそかにしている、と言われたのです。

外側の清さにはこだわるが、自分の内側の汚れには無頓着だ、ということを書いておられるのでしょうか。

十分の一を献げる、といった律法で定められたことはしっかりまもるが、内面から溢れ出る正義の実行とか神への愛は貧しい、ということを書かれたのでしょうか。

ルカ福音書10章にも、律法の専門家が登場していました。彼は主イエスに問いかけたのです。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」何をしたら、とは律法のどの掟を守れば、という意味です。だから主イエスは逆に専門家に問いかけられました。「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読むか。」律法の専門家は全部知っていました。すぐに答えました。大事なことは何か全部知っているのです。「正しい答えだ。それを実行しなさい。」と主は答えられたのです。ところがその後主が語られた譬は、どう考えても、わたしたちが日常実行可能な愛のわざではない、ウルトラな隣人愛でした。傷ついた旅人を助け、介抱し、宿屋に連れていき、自分のお金を出して、介抱を依頼する。さらに費用が掛かれば自分がお金を出す。とても手に負えない隣人愛でした。なぜ主はそんなたとえ話をされたのでしょうか。

律法の専門家にあなたは律法の知識はある、後は実行のみだ、というのなら、もっと手の届く隣人愛を示せばよかったのではないか。仮に実行できたとして生涯に数えるほどしかできないような、こんな隣人愛を、譬話で語り、実行しなさい、とはどういうことなのか。ここで主イエスはよく言われるような「さあ、あなたも隣人愛をしてごらんください」、ということを手紙に言おうとされたのではない、ということはこの聖書箇所を虚心に読めばわかることです。

頭でわかっていることが、いざ現実の場面においては、うまくできない、というだけでなく、何もできないということだって普通にあることです。傷ついた旅人の横を見て見ぬふりをして通り過ぎた祭司やレビ人は、あの譬の中で、最もリアリティがあるのです。律法の専門家は、何をすれば、永遠の命を得ることができますか、と問うた。そして彼はその答えも知っていた。神を全力で愛することと、隣人を自分のように愛すること。だが、それができない。それはもちろん律法の専門家だけの話ではない。誰もが根本そういう自分を抱えているのです。あるいはこのたとえ話は、わたしたちが、神を全力で愛することも、隣人を自分のように愛することもできない、貧しさの中にあるということを示唆したとえなのかもしれません。

今日の聖書箇所はあの10章と深く響き合っているのではないかと。

ファリサイ派の人に向かって、「外側は清めているが、自分の内側は強欲と悪意に満ちている」と主は言われた。このファリサイ派の人は、極悪人だったわけではないでしょう。おそらく多くの人たちから尊敬される、すぐれた宗教

者だった。そして主イエスを食事に招くほどの見識や謙虚を身に着けた人だった。この人がとんでもない悪人だったとはとても思えない。にもかかわらず、主は「内側は強欲と悪意に満ちている」と言われた。「正義の実行と神への愛はおろそかにしている」と言われた。それは、10章に登場した律法の専門家と同様、神を愛することにおいても、隣人を愛することにおいても、貧しいわたしたちの姿を主イエスが知っておられたということです。特別な極悪人でもなくて、内側に醜いものがあふれている人間の姿、主はそれをよく知っておられたということです。だからこそ、どんなに外側を清めたとしても、それで内側も清くなるわけではない、ということをおっしゃられるのです。人間の内側には、自分でもどうすることもできない強欲だとか、悪意だとか、罪があるということです。律法を学んで、それにどんなに習熟し、掟を守っていても、内側にはどうにもできない悪があるということです。

そのことを知る必要がある、ということの主イエスは言われておられるのです。

マルコ福音書では金持ちの男が、この律法の専門家と同じ質問を主イエスにしています。「先生、永遠の命を受け継ぐためには何をすればよいでしょうか」とすると主は十戒の教えを語られます。男は、それらはみな守っていますと答えます。すると主イエスは、「あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば天に宝を積むことになる」と答えるのです。男はこの言葉を聞いて気を落とし、悲しみの中、立ち去っていく。主イエスは何も意地悪を言われたわけではない。律法を守るというだけではどうにもならない、人間の内側の汚れの深さを示そうとされておられるのです。自分の内側は強欲と悪意に満ちている、そういう人間の抱え込んでいるものがある。だから、持てるもの全部を差し出すなんてことはできないのです。別に彼だけでなく、だれでもできない。隣人愛のたとえと同じ。わたしたちにはできないのです。神を全力で愛するという事などもっとできない。強欲も悪意も持っているからです。砕け散るのです。

主はファリサイ派の人や律法学者は、律法は大事だといいいながら、神への愛は本当のところおろそかになっている、だから言行不一致なんだとか、形ばかりで真の実践が伴っていない、という急所を突いて、だからダメなんだ、と言っているのではないのです。人間とはそういうもの、言行不一致にならざるを

得ないものなのです。知っていても実行できない、そもそもわかっているから実行できると思うこと自体が思い上がり。よきサマリア人のたとえ話に出てくる祭司やレビ人のように、隣人愛の大切さを知っていて尚、見て見ぬふりをしてしまう。わたしたちは貧しさや弱さや、強欲や、悪を抱え込んで生きているのです。

大事なことは、そのようなわたしがイエス・キリストによって背負われて活かされているということを知ることです。ファリサイ派がそうであったように、律法を掲げて生きようとするのはいい。だが、根本のところでは、神を全力で愛し、自分を愛するように隣人を愛することに挫折している、そのことに気づく必要があるのです。そこで十字架に背負われている自分をまこと知らされて、はじめて、神への愛、人への愛に破れている自分が、自分の力ではなく、神とキリストの愛の中に活かされているものとして、神と隣人へと向かう道が与えられていくのです。愛せるから隣人へと向かうわけではない。よきサマリア人のようになれるから隣人に向かうのではない。祭司やレビ人のようなわたしが、それでもなお、キリストの愛の中に活かされていることを知って、隣人に向かうのです。

そのことを忘れて、さあ、律法を守りましょう、神を全力で愛し、隣人愛にいきましょう、あなたは隣人愛に向かってないからダメだ、というのは、不幸だ、わざわざ、とキリストは言っておられるのです。逆な言い方をすれば、わたしたちは愛において破れていることを受け入れていいということです。なぜならキリストはそういうわたしたちを背負ってくださっているからです。内側に強欲と悪意が満ちている自分を受け入れていい。そしてキリストに背負われている自分を底で受け止めて、神と人とに向かっていけばいいのです。